

公益社団法人 私立大学情報教育協会
2022 年度第 3 回短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会議事録

- I. 日 時 令和 4 年 9 月 15 日(木)14:00~16:00
場 所 Zoom 会議室
- II. 出席者 戸高委員長、三田委員、西岡委員、後藤委員、大重委員、治京委員
及川先生(山野美容理容短期大学)、深町先生(和泉短期大学)、衛藤先生(別府大学短期大学部)
(事務局 井端事務局長、中村、山田)

III. 検討事項

1. Google Classroom 画面表示変更等の調査報告(西岡委員報告)

Google Classroom を使用したコンソーシアムサイトの仕様変更の紹介結果について、西岡委員から質問事項を 3 つにまとめ打診した結果について、次のような報告が行われ、委員会として変更できないことを確認した。

- ① 一つは、“授業”のタブ名称を“取組み”に変更できないか、二つは、Class を起動したときに、最初にストリームが出てくる順番を変えられないか、三つは、Classroom の起動時にクラスの一覧が表示されるがクラスの名前の下が空白が開いているので、この部分に短い表示を入力できないか、以下のように問い合わせた。
- ② 管理者権限でチャットにより Google に直接たずねた結果、授業の名称変更は実装されてなく、関連する代替案はないので変更できない。最初にストリームが出てくる順番の変更も含め、変更は Google 内部でしかできないことになっている。但し、こういう要求は過去にもあったということは言っていた。また、クラスの一覧表表示の空白部分への書き込みは、できるだけコンパクトにするという方針で作ったので追加記入はできない。科目欄、セクション欄があまり長いと途中でカットするようになっているので、空白が目立つようになっているとの説明があった。一種のバグかもしれないが、変えようがないという状況になっており、こちら側の仕様変更については、変更できないことが分かった。

2. コンソーシアムサイトと本協会のホームページの掲載連携について

前回の委員会で私情協ホームページにコンソーシアムの活動全体をコンパクトに表示し、そこから Google Classroom のサイトに繋いでいくことにしたことを受けて、事務局から、私情協ホームページに掲載する内容を資料③「短期大学生による地域貢献支援事業の試行紹介」の通り作成したことについて、概ね以下のような説明が行われ、了承された。

- ① 地域貢献支援事業の試行研究は、短期大学生の社会人基礎力の強化、短期大学のプレゼンス向上を促進する事業として、複数の短期大学間や自治体等と協働し、学生主体の教育活動を通じて「短期大学生による地域貢献支援事業」を推進するコンソーシアムをネット上に形成し、私立の参加短期大学間で試行し、支援事業のニーズや課題を共有する中で可能性を探求することとしている。
- ② 活動の趣旨は、Society5.0 の時代では新たなものを創造して多くの分野に価値を生み出していくことが想定されることから、課題解決にかかわれる人材の育成が大学の教育に要請されている。地域に根差して貢献活動を展開している短期大学では、教員・職員・学生を一体化した「短期大学力」を強みとしており、地域の課題解決から世界の持続可能性を目指した課題解決(SDGs)に繋がる教育が期待される。本協会では、全国の短期大学に対し、ICT を活用した教育を通じて、複数の短期大学間や自治体等と協働する「短期大学生による地域貢献支援事業」への参加を呼びかけ、賛同された短期大学を中心に「地域貢献支援事業コンソーシアム」活動を進める。
- ③ 支援事業で期待される効果は、一つは、地域社会とどのようにかかわっていくべきかを体験させることにより、「市民としての自分らしさ」を気付かせ、コミュニケーション力や社会人基礎力などの向上が期待できる。二つは、分野横断的な学びを通じて、学修成果を社会実装に繋げる貴重な機会を提供できる。三つは、社会の役に立ちたいという高い精神性・自由で豊かな感性・情報発信力などの学生力と教員の研究力、職員のマネジメント力を一体化することで、短期大学力としての存在感を社会に強くアピールできる。
- ④ 支援事業の内容と報告は、Google Classroom を活用したコンソーシアム活動のプラットフォームの枠組みを掲載した上で、(1)高齢者との交流を促進し、課題解決策を導き出す支援事業、(2)地域価値を発見・発信する支援事業、(3)地域課題の解決に向けた取組みを共有する支援事業の概要を紹介している。その上で 2021 年度の活動報告について、プラットフォームのサイトに接続し、支援事業の経緯、概要と成果、ノウハウ、展

望を簡潔に紹介している。その上で具体的な支援事業の取組み状況、参加学生からの声、自治体等の感想などを掲載することで、支援事業への参加を期待している。

- ⑤ 支援事業で実施する教育の位置付けと仕組みは、「課外の学修活動」又は、「サービスマスターニング」、「課題解決型プロジェクト」などとし、単位認定及び学修成果の評価は、各参加短期大学としての考えを尊重している。
- ⑥ プラットフォームの環境と運営は、支援事業の活動情報を短期大学が共有・活用できるように、現在 Google Classroom を活用しているので費用負担はない。クラウド型グループウェアの管理運営は、当面本協会の運営委員会で対応している。
- ⑦ 支援事業に参加するための準備としては、短期大学の担当者に本協会より Google Classroom 活用に必要なアカウントとパスワードを付与するので、短期大学としての担当者1名以上、本協会の短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会に連絡する必要がある。以上の他に、「高齢者」又は「地域価値」の支援事業に参加する短期大学には、学内での教職員連携体制への働きかけ、自治体等との教育連携の働きかけなどの準備が考えられる。
- ⑧ 2021 年度活動報告の内容は、事務局で編集しているので資料③.1「高齢者支援事業」、資料③.1.1「異世代交流支援事業の報告」、資料③.2「地域価値を発見・発信する支援事業(A、B、C)」、資料③.3「プラットフォーム(Google Classroom)の閲覧方法」に沿って確認し、一部修正した。なお、高齢者支援事業については、学生からの声を異世代交流支援事業の報告に入れることにし、次回委員会で紹介することにした。

3. 学びの協同化の具体的な実施計画の作成について

本年度の活動として、コンソーシアム活動を複数の短期大学間で協力して行う「学びの協同化」を中心に進めることになり、高齢者支援事業、地域価値支援事業における試行授業のテーマ及び内容、参加学生、参加社会人、日程等について検討した。

(1) 高齢者支援事業の協同化について

三田委員から、10月1日(土)に実践女子大学、実践女子大学短期大学部、山野美容芸術短期大学の学生17名が参加し、カメラによるインタビューと撮影を行うことを計画している説明について、以下のように行われた。

- ① 学生3名で1チームを構成し、参加高齢者4~5名に対して、普段接することのない高齢者に聞きたいテーマ(例、コロナ禍について、スマホ決裁についてなど)を話し合う予定にしている。なお、高齢者の方は BABA lab のメンバーの方に多く入っていただくようにする。
- ② 当日の午前中から午後にかけて、学生のチームで、インタビューのテーマ・内容を考えさせて、午後1時間かけて高齢者に向けたインタビューの練習を行う。その後で1時間かけて4チーム又は5チームで高齢者へのインタビューを実施することを考えている。
- ③ その後、10月中に映画監督の方の指導を受けながら編集した3分動画を完成させ、11月に Zoom で完成動画を見ていただき、30分程度意見交流を行う予定にしている。

(2) 地域価値支援事業の協同化について

治京委員から、大阪夕陽丘学園短期大学、別府大学短期大学部、和泉短期大学の学生による課外授業による地域価値支援事業の協同化について、資料⑤の「真珠コンテスト(案)」が提案され、概ね次のような説明が行われた。

- ① 学びの協同化のキーポイントとして、商品開発を考えている。志摩市からは「伊勢といえば赤福」、「志摩市といえば真珠」というネームバリューを期待している。今、真珠の価値が微妙になっていることから、新たな価値を見出すため、協同化による真珠コンテストを行い、商品開発、最終的に地域価値の創成に繋げていければと考えている。
- ② 真珠コンテストの目的は、真珠、貝殻の新しい価値を発見する。コンテストでは、「真珠酢」を使ったレシピの作成・調理コンテストに限定する案、あるいは装身具と食品のギャップをどう埋めるかというマーケティング手法を加味したコンテスト、食としての真珠以外の価値も加味したコンテストが考えられる。
- ③ 学びの協同化には、関心のある学生を選考することが重要で、1回生又は2回生、ゼミ生又はボランティア公募の学生とするのか、検討を要する。選考期間は10月末までには選考を終了しないと、今年度の後期で終了できない可能性が高いので、関係校で検討してはと考えている。すぐコンテンツを開催するのは難しいので、協同化への戦略として、Zoom で繋がり、お互いを知った上で、真珠の過去・現在・未来を知り、そこからアコヤ真珠、貝殻を調べる。その上で、テーマを決めて、コンテスト(試食会)を開催し、次年度につなげる案を考えた。
- ④ オンラインの開催は各校の教員が Zoom を準備する。司会進行は、最初と最後のコ

ンテストは教員が行うとして、それ以外は学生が持ち回りで司会するようにして、1時間を超えない提案としている。

- ⑤ 実施時期としては、一つは、第一段階でパイロット的に1月から3月までに月2回行い課題を整理し、来年度に向けてブラッシュアップした計画を今年度作成して、新年度から1年間かけた7回のプランにする。二つは、前半は今年度、後半を来年度行う方法で、今年3回、来年4回又は今年4回、来年度3回行うことも考えられるので、検討いただきたいと思っている。
- ⑥ コンテストに向けた7回の詳細計画は次のように考えている。
 - 1回目は、「とにかく繋がろう」を目指してZoomによるトレーニング、学びの協同化の説明、次回の「お互い知ろう」へと繋ぐ。
 - 2回目は、2022年後期に参加校の紹介、郷土の紹介をクイズで方言を用いて説明し、次回の「真珠の過去・現在・未来を知ろう」へと繋ぐ。
 - 3回目は、真珠の過去・現在・未来を各校で調べて発表するか、一短期大学から説明し、それに対して議論を行うことを考えており、次回の「アコヤ真珠、アコヤ貝を調べてみよう」へと繋ぐ。その際、事前動画の作成を提案させていただく。また、試料の提供は、志摩市から本学、本学から各校にするのか、志摩市から各校に振り分けていくのか、検討する必要がある。
 - 4回目は、調べてみようの説明、すべての説明が終わった後で議論し、次回の「テーマを決めよう」へと繋ぐ。ここで真珠酢に限定するかどうか、決めていないとテーマは決まらないので、ここを決めてから進むべきと考えている。
 - 5回目は、テーマについての説明を行い議論して、次回の「コンテスト(試食会)を開催しよう」へと繋ぐ。コンテストの説明も事前動画が必要と考えている。
 - 6回目は、2022年後期にZoomでコンテストを行い、表彰式をして「次年度に繋げよう」に入る。その際、食のサンプルを郵送、レシピで再現させるなど試食の方法について衛生法も考慮して検討しておく必要がある。また、自治体も参加するトータル的なコンテストになった場合は、食サンプルだけでなく、他の付加価値を見出すことになるので、食コンテスト以外の方法を検討しておく必要がある。
 - 7回目は、コンテスト後に参加校の学生がどういうふう感じたのか、感想を互いに出し合い総括を行い、次年度に繋げる戦略を提示することを考えている。コンテストで金賞を受賞したことが、商品開発への戦略となり、地域価値の創成に繋げることが可能なプランということで提案している。
- ⑦ 既存の商品としては、「真珠酢」、真珠の酢をベースに美容成分を配合した「パールPLUS」、真珠と粉末を飼料にした「パールポーク」、ミキモトのスキンケアシリーズとして「ムーンパール」がある。これをベースとして、新たな価値は何かというところになるので、テーマはある程度大きく分類し、機能性とSDGsにつなげるようにしてはと考えている。真珠を食べたら体の機能が向上する、貝殻の産廃処理問題の解消につながるなど、学生に説明する必要があると考えている。
- ⑧ 機能性としては、真珠、真珠の貝殻を食べることで、ラットの体脂肪の減少、ヒトの白血球の活性酸素に及ぼす影響が調べられている。体脂肪の減少について、動物実験代替法で崇城大学石田先生と私の方で協同研究しており、肝細胞を用いた脂質代謝メカニズムの解明について基礎研究を行っている。もう一つは、臨床的に学生を用いた体脂肪の測定が考えられる。しかし、各校で実施した場合に、人を対象とした医学研究に対する倫理指針に抵触する可能性があるため、参加校の中で代表して倫理審査を通していただく必要がある。また、この体脂肪を測定するにあたり、共同で科学研究費の申請を検討してはどうかと考えているので、検討いただきたい。

次いで、委員から次のような意見があり、次回改めて検討することにした。

- ① 機能性の科学的な知見を集めていくのは難しい。商品化されている真珠酢などであれば、学生に体験させることによって効用があることを調理のコンテストで援用していくという中で、いろいろな体験を学べるのかなと思った。他の短期大学にも参加できるように、真珠コンテストの次の繋がり展開を今後考えていかないといけない。
- ② 規格外の真珠を学生は見たこともないし、手にしたこともないので、参加校に資料を配布して観察をさせてからアイデアを考えさせるところから始めてはどうか、との提案に対して、委員から感覚を共有体験すれば、仲間意識もできるとの意見があり、賛同が得られた。
- ③ コンテストの試食会について、調理した物について保健所から何か指摘されないか、との意見があった。これについては、レシピにして参加短期大学で作ることで解決できる。薬剤師、調理師がいれば学校で販売許可がとれるので、販売先に送るというので、衛生法はクリアできるのではないかと考えている。

- ④ 和泉短期大学では、この計画の方向性としては面白いが、保育の実習と重なるので、参加が難しい。コンテストに行くプロセスの間でアイデア出しについて協力することに学内で賛同を得ている。
- ⑤ 志學館大学は、後方支援に徹しようかなと思っている。今のところはアシストに徹しようかなと思っている。
- ⑥ 別府大学短期大学部としては、ゼミのような形で積極的に取り組んでいきたいと考えている。授業とか学科単位の参加は期間をどうするかが問題となるので、様子を見て検討していきたい。
- ⑦ 真珠コンテストのネーミングについて、最初の繋がるところで、学生の紹介動画の中で発表する方法を考えていくことにした。
- ⑧ 大阪夕陽丘学園短期大学、別府大学短期大学部、和泉短期大学の共同で3年計画の科研費の申請をいそぐことにした。
- ⑨ 1回目の時期としては、学生の選考作業終われば、11月の1週目10日とする。第2回目は11月24日、3回目は12月15日、4回目は1月12日、5回目は1月26日、6回目は3月2日、7回目は3月9日又は16日の方向で考えることにした。
- ⑩ 次回までに、それぞれ先生方が学生をある程度集めて、どのくらいの規模になるのか、何年生なのか、どの分野の学生になりそうか、持ち寄って確認することになった。また、繋がるための説明動画(10分)の作成を治京委員が作成し、11月2日に限定YouTubeに掲載することにした。

4. その他(今後の日程)

次回は、11月4日(金)18時に開催し、協同化に向けた具体的な計画を中心に確認を含めて検討することにした。